

か、よくわかりません。とにかく弥次馬はよろこび、諷刺文、手紙、版画などが、つぎつぎとよせられました。このさわぎが終ったのは、ようやく年を越してからでしたが、7月10日付の長文の手紙を最後に、ルソーとヒュームのあいだの交渉は終わりました。それからルソーはしばらくウートゥンにいたが、1767年5月、自分は陰謀の犠牲者だという手紙をのこして、イギリスを去っています。

けんかから半年たってすこしは冷静になったヒュームは、またまた保護者ぶって、フランスでのルソ

ーの保護を、テュルゴウに依頼しています。ルソーからみれば、「いらぬお世話だ、偽善者め」というところでしょう。

以後兩人は、ふたたび会うことはありませんでした。その後もルソーは、幾つかの著作を完成させましたが、他方、ヒュームはついに新しい著作をかくことができませんでした。

やはり、ルソーの方が一枚うわ手だったのでしょか。1766年7月10日付の手紙を、是非よんでみてください。
(社会文化・助教授)

科学の入口に立った4日間

＝大山野外巡検レポート＝

大自然のふとこころにて

今村厚子

環境科学野外調査Aという授業のため、夏休みの初日から三泊四日費して、鈴木先生、堀先生をはじめとする土壌、地形、植生の各分野の指導をされる4人の先生方、気候分野担当の環境の院生2人にイラン人の留学生、そして私達学生20名は、鳥取県は伯耆大山と米子の近くの皆生海岸に出かけました。

私達はこの巡検に参加するにあたり、気候、地形、土壌、植生の3班に分かれ、担当を決めて参考資料を作り、全体で何度かミーティングを持つなど前もって準備をしてから大山に向ったのです。

大山の西側山麓の樹水高原にある研修所に全員が揃ったのは11日の午後4時過ぎで、あいにくの雨と遠距離を来たせいか、皆疲れている様子でしたがと

にかく部屋割りをして夕食や入浴が済むと普段と変わりがなくなりました。部屋の窓から見ると目の前に大山が迫っていて大部分雲に隠されてはいますがどっかりとそこにあるといった趣きです。

翌12日は天気も良く、記録用のボードを首にぶら下げ、弁当や缶ジュース、資料(とても重い)などがいろいろ入った袋を担いで夏山登山道へ向いました。単に登るだけではなく、一合目ごとに気温、高度、時刻を測定し、風や傾斜に気を配り、周辺の植生をいちいちメモしながらの登山はきついものです。周囲のブナやミズナラの林は爽やかな緑色でしっかりと森林特有の精気がある感じでちょっと感動ですが、そのうちに傾斜は30度くらいになるし木の根がはびこっている所に道があるしで、登山に慣れない者にとっては登るだけで精一杯になりました。五合目と六合目の間でそうした森林は無くなり、低木が繁茂し、道には岩石がごろごろして歩いて歩きますが視界が開け、遠くは中海まで見えるすばらしい景色になります。酸欠のオタマジャクシのような姿で登って行くと心ない下山者がすれ違いざまにもう少しですよと声をかけてくれました。

六合目で昼食後、さらに行くと八合目あたりからキャラボクが多くなります。九合目からは傾斜が緩くなり一帯にキャラボクが繁っているのですが大崩壊地が迫り危険でもあります。こうした風景が濃い霧の中で白く惚けて見える様は強く印象に残っています。さて、1710mの頂上は気温18度、湿度が80%



で髪の毛に水滴がつくほどでした。付近の植生は人がよく踏むために裸地が多く代表的な植物はオオバコです。ともあれ記念写真に納まると頂上小屋で休憩をしました。ちなみにその売店では缶ジュースが250円もするのです。こうして約4時間かけて我々の登山は終わりました。

13日は地形や崩壊地の砂防堰堤の観察、二ノ沢付近の林の中で植生、地形、土壌などの総合的な調査などであちこち歩き回り、途中でかなり強い雨に降られ、大山寺付近ではひどく濡れてしまいました。

そして最終日。バスで皆生温泉へ向かい海岸地形の観察をしてから私達は解散したのです。

野外巡険に参加したことで、一番に感じたのは自然に触れることの大切さです。こう言ってしまえば当たり前すぎる事ですが、私などは少しだけ苦しい思いをして、初めて自然の存在を大きく感じたものです。

最後に、普段ほとんどその御人柄を知らなかった先生方に対し、研修やコンパを通じて少しはお近づきになれたような気がします。

大山巡検

— 植生を中心に —

大原高志

大山巡検は7月11日～14日に行なわれました。ここでは植生班の一員として書いてみたいと思います。

2日めの登山日、車で宿舎から登山口まで移動し(ランドクルーザーには13人の男が乗り込みました)、登山の開始です。一合目ごとに休み、気温の測定と植生の説明をうけながら登っていきます。植生は少しずつ移り変わり、ブナの樹高も3合目あたりで最高となりますが5合目過ぎたあたりで植生ががらりと変わり、数分間登るだけでブナ林から崩壊地植生に変わってしまいます。大山は今から約1万7千年前に活動を停止し、それ以来少しずつ崩壊が進み、そのような所はブナが育たずにダイセンヤナギ、ヒメヤシブシ等の植生に変わります。これらはいわゆるパイオニア植生で、その境はかなりはっきりしています。

8合目あたりになるとキャラボクの純林が現われますが、道をはさんで左側は崩壊地植生。登山道の近くまで大山が崩れていることが植生からもわかります。実際、この上の登山道では、歩く所は木の根で土が押えられて形は保っているものの、その下は土がえぐれてオーバーハングしている所があるとい

った具合です。もう8合目ともなるとガスが南側から吹き上げて髪はべったり濡れてしまいます。

キャラボク純林(こんな低い木が一面に生えている所は初めて見ました。)の縁の登山道を進んで頂上へ。頂上はほとんど植生がなく、人の踏まない所にはオオバコも見られます。都会の道ばたにも、冬の寒さのきびしい所にも生きられる、たくましい草です。

頂上で写真を撮り、休息したのち我々は気温測定班とその他に分かれて下りました。登りではふうふう言っていた堀先生が下りになるとやけに早く下っていかれたのが印象的?でした。

3日め、第2のメイン、植生調査です。大山の南側、二の沢を過ぎたあたりで車を降り、林の中に入って適当な所で25m×25mの方形区を取ります。植生班はこの中でどんな植物が、どれくらいの数で、どの程度の被度で生えているかの調査を行ないます。あとで整理をしてみた結果、ブナ林と思っていたところが、意外にミズナラが多く、ミズナラ林と呼んだ方がふさわしいようであったこと、しかもブナとミズナラがただ混じりあっているのではなく、ある分布をなして、その中にブナ、ミズナラが生えているようであることなどがわかりました。また、どうやらここはかなり新しい(と言っても100年のオーダー)森であるようです。というのも極相林の種であるはずのブナが全体的に見てミズナラよりも小さいこと、ここの土壌が未発達で植物にとって有用な黒い土、A層の厚さが27cmしかなかったことなどがわかったからです。

4日めに山を降り、皆生海岸の地形を見たのち米子駅で解散しましたが、僕の印象に残ったのは、当り前の事のようなのですが、そこにあるものが、そういう形で存在しているのは何らかの原因が起ったことだということです。その原因を解明するのが科学ということです。なぜ大山があそこにあり、あのような形をしているのか、今現在そこに生きている動植物はなぜそこで生きている、あるいは生きられるのか、それをいやがうえでも考えた4日間だった気がします。

大山巡検日記

西中勝喜

7月11日～14日の3泊4日(3泊3日と言った方がいかかもしれませんが)の日程で、大山およびその周辺の地形、気候および植生の調査に行き参りました。日程のわりに調査内容は多方面にわたり、十分な調査ができなかったように思いますが、その調査の様子を紹介したいと思います。

7月11日

朝早く広島を出発して夕方に雨と雷の歓迎を受けながら大山研修所に無事到着。若干名は汽車に乗り遅れ、PM8:00からのミーティング中に到着。ひとり淋しく晩ごはんを食べておった。それを見て“明日の山頂登山はガンバロウ”と思った。

7月12日

大山山頂登山。各合目ごとに気温、気圧の測定および植物の分布の調査を行う。植生分布は高度によりその分布をはっきりと分け、5合目あたりまでのブナ林の中では、昨日の雨のためか湿度が非常に高く汗が一向にひかず疲労する一方であったが、6合目あたりから比較的視界が開け、時おり雲間から弓ヶ浜のきれいな弓形が伺え疲れを忘れさせてくれた。それから頂上までは風が強く夏の暑さをしばし忘れそう快だった。また気温の測定では、風が強かったせいか逆転現象がみられず残念だった。



7月13日

大山周辺の火山地形の調査、大山南側の高度約1000mの地点での土壌調査と毎木調査を行う。毎木調査というのは、ある地点の樹木についてその樹高と胸高直径を測定し、その結果から未測定の樹木の樹高を推定したりある樹木の占める割合を調査するもので、比較的スムーズに調査が進んだ様子だった。また土壌調査では、深さ約1mの試坑を掘り調査したが、深く掘るにしたがって土壌ははっきりとした層を成している様子が伺えた。なお、試坑を掘るに当っては、ある先生の予想に反して樹木の根の妨害が激しくけが人さえ出るほどでした。

7月14日

弓ヶ浜半島の根元にある皆生温泉地区の地形調査を行う。ここでは弓ヶ浜の浸食を物語る試料があり、現在ではそれを防ぐために約50m沖にテトラポットが積まれ少々殺風景だった。また弓ヶ浜の砂は大山の土砂であることを聞き自然の力に驚きを感じた。

残念ながら温泉に入る余裕はみなさんなかったようで、あしからず。

このように調査の様子をおおざっぱにかいつまんで紹介してきたわけですが、日頃あまり自然との接触を持たない自分にとって自然を顧みるいい機会になったと思います。来期もこのような巡検があると嬉しいですから、1年の方々はコースを問わず参加されたらよいと思います。



ウィーン大学

西村 雅樹



ハプスブルク家の支配するオーストリア帝国が、いまだ隆盛を誇っていた19世紀の後半、拡大の一端をたどるその首都ウィーンでは、大規模な市街地整備が進められた。中世以来の市壁は取りこわされ、リング通りと呼ばれる幅の広い並木道が設けられた。今、この並木道をめぐると、木々の葉がくれに、宮殿、教会、国会議事堂、市役所、証券取引所、美術館、博物館、オペラハウス、劇場等、数々の建物が目の前に展開する。およそ首都たるに必要な建物は皆、この通りに沿って建て直されたのであった。そしてその中には大学も欠けてはならなかった。新ルネサンス風のスタイルで建てられた大学は、今も象牙色の優美な翼を並木道に沿って広げている。



ウィーン大学正面

正面入口から入ると、ロビーの左手に、歴代学長の名が大きな碑銘二枚に刻まれているのが目に入る。創立1365年という歴史を物語る碑銘である。創立当時の建物はさすがに今はないが、バロック時代の石造りの校舎は現在も旧市内に残されている。ロビーから中庭を取り巻く回廊に歩を運ぶと、胸像が並んでいるのが目をひく。物理のボルツマン、医学のビルロート、音楽批評のハンスリック等、かつての有名教授の像である。その中には、生前この大学ではむしろ不遇であったフロイトも欠けてはいない。もの言わぬその像は、いったい何を語ろうとしているのであろうか。

この回廊を後に階段を昇って行くと、図書室に行

き当る。ウィーン大学の蔵書数はおよそ200万冊。その歴史の古さゆえ数々の稀覯本を有する。大学図書館という性質上、分野によっては欠けているものも少なくはないが、少なくともオーストリアの文化に関しては、一大宝庫であると言って過言ではない。

図書室に隣接して大小の講義室も並んでいる。小人数の演習や講義は各研究室附属の教室で行なわれ、この大学本部内の講義室では、比較的多人数の講義、それに各学部共通の講義が行なわれることになっている。授業の時間割は一定していない。朝8時から始まる授業がある一方、夜の8時に終る授業もある。昼12時に始まる授業もあれば、12時半に終る授業もあるという具合だ。授業によっては、窓ぎわや黒板のま横まで、学生が鈴なりになってひしめいている教室もある。しかしおしなべて大学の中は静かだ。

その構内が時々華やぐことがある。時折行なわれる卒業式の日だ。この日には卒業生の家族や友人一同も、着飾り花束をたずさえて式に参列する。式の後、卒業生を取り囲んでにぎやかな祝福の輪ができる。大学卒業の肩書きは、今でもエリートとしての道を保証するものらしい。しかし、社会変動の動きのゆるやかなオーストリアにおいても、最近大学卒業の意味合いは変わりつつある。今年、ウィーン大学の学生数は4万人を数えることになったという。ここわずか数年間で倍増したとのこと。日本と違って、高校を卒業して大学入学の資格を取れば、医学部など一部の学部・学科を除いて、無条件で大学に入学できる制度下では、急速に増えつつある大学生数を制限できないようだ。この問題は重要な社会問題になり始めている。



卒業式の光景